



森のちやれんがニュース

2018 秋

北海道博物館
HOKKAIDO MUSEUM

Newsletter vol.13



第4回特別展 | 北海道150年事業 | 松浦武四郎生誕200年記念 『幕末維新を生きた旅の巨人 松浦武四郎 ー見る、集める、伝えるー』を開催 (2018年6月30日～8月26日)

＜北海道の名付け親＞と呼ばれる松浦武四郎(1818～1888)。現在の三重県松阪市で生まれ、幕末期に北海道を6回踏査し、アイヌ民族の生活状況などを克明に記録したことはよく知られています。一方、武四郎は幕末の志士や政治家、学者、文人との幅広い交流のなかで、＜情報通＞や＜蒐集家＞としての顔も持っていました。

この特別展では、全国各地に所蔵されている武四郎に関する資料が一堂に集合。強い好奇心と情熱のもと、旅に生き、幕末維新の時代の諸相を集め、伝えようとしたその希代の生涯をたど

りました。

また第2会場の記念ホールには、こども体験展示室「武四郎を楽しもう！」を開設。プロジェクションマッピングや武四郎が制作した双六の巨大版などで、武四郎の旅を体感する家族連れのお客さまも多く見受けられました。



こども体験展示室「武四郎を楽しもう！」



CONTENTS

- ② 収蔵資料紹介
あれから50年ー久保寺逸彦最晩年のしごとー
- ③ 展示/イベント協力
北海道博物館の資料やノウハウが、場所を変えて活躍しています
- ④ 研究活動紹介
歴史的建造物を保存する野外博物館
「北海道開拓の村」
- トピックス
- ⑥ ・春のイベント at はっけん広場
・北海道の名付け親・松浦武四郎ランチ
～大地の味～
- ⑦ アイヌ民族文化研究センター日より
アイヌ文化巡回展を上川町(層雲峡)と標津町で開催しました
- ⑧ 活動ダイアリー

収蔵資料紹介

あれから50年—久保寺逸彦最晩年のしごと— 田村 雅史

アイヌ民族文化研究センター 研究主査



1968 (昭和43) 7月の録音テープ
採録地：芽室、白糠、雪裡

アイヌの口承文芸や宗教儀礼などを研究した久保寺逸彦氏（1902年～1971年）が残した音声資料の中に1968（昭和43）年から1970（昭和45）年に録音された資料が68点あります。内容は、出産、結婚、葬儀などいわゆるアイヌ民族の通過儀礼に関する全般的な聞き取り調査の録音です。総録音時間は約108時間になります。

調査協力者の出身地は、旭川、釧路、サハリン、様似、門別など広い範囲に及び、規模の大きな調査でした。

ただし、久保寺氏の死去により、この調査の成果が世に出ることはありませんでした。また、不思議なことに調査時のノートも残されていないため、久保寺氏自身がどのようにこの調査を活用しようとしていたのかは知る術がありません。

そこで、久保寺氏の採録から50年経った今、残された他の資料などを手がかりにして、この調査の経緯や背景などを探ることをとおして、この資料群を紹介したいと思います。

まず、最も直接的な関係を示す資料は、久保寺文庫の中にある昭和42年度と昭和43年度のアイヌ文化保存対策協議会資料、計4点です。「アイヌ文化保存対策協議会」（以下、協議会と略称します）とは、アイヌ文化の保存、および調査研究を目的とし、各事業を協

議し、実施する機関として、1962（昭和37）年に当時の北海道教育庁社会教育課に設置された協議会です（久保寺文庫にある「アイヌ文化保存に関する意見書」という資料により、協議会の目的等を確認することができます）。またこの協議会は、「開道百年事業」の一環として1969（昭和44）年に刊行された『アイヌ民族誌』の編さん事業を担当した機関でもあります。

協議会の昭和43年度の第一回目（7月29日）の資料には、「アイヌの通過儀礼ききとり調査」と題した項目があります。そこには、調査地の計画や調査自体が三カ年計画であることと共に、「担当久保寺委員」と掲載されています。

もちろん、前年度の昭和42年度からこの事業に関する協議が行われていますが、他の3点の会議資料の中には久保寺氏の名前は記載されていないため、現時点でこの会議資料がここで取り上げている音声資料と協議会との繋がりを唯一示す資料と言えます。

協議会の数年に及ぶ活動は、1976（昭和51）年3月に当時の北海道教育庁振興部文化課編、北海道文化財保護協会発行の『昭和50年度アイヌ民俗文化緊急調査報告書（無形文化財1）』の巻末に添えられた概略を記した表により知ることができます。その表だけでは、ここで紹介している音声資料が含まれるのかはわかりませんが、協議会の会議資料とつき合わせてみると、昭和43年度から昭和45年度の「アイヌ民俗調査」として記載されている「アイヌ文化採訪記録調査」がそれだとわかります。

冒頭で、ここで紹介している音声資料の聞き取り調査の成果が世に出ることはなかった、と言いました。久保寺氏は『アイヌ民族誌』の執筆も行っていますが、管見の限り、これらの聞き取り調査の成果はほとんど活用されて

いません。久保寺氏が執筆する際に主に活用したのは、次の二つの資料群だと思われます。

一つめは、久保寺氏が1940（昭和15）年、1941（昭和16）年に平取と穂別で行った、結婚や誕生といった通過儀礼や植物関連の聞き取りを行った調査資料です。二つめは、1950（昭和25）年から1954（昭和29）年にかけて、日本民族学協会が行った、アイヌ民族総合調査の資料です。この調査では、アイヌ語の親族呼称、家系、漁猟、妊娠、結婚、先祖供養、葬式、信仰など多彩な項目について調査が行われました。

これまでの話を久保寺氏の調査歴としてまとめてみると、口承文芸を中心にした調査から儀礼や宗教に重点を置いた調査に移行したのが、1940（昭和15）年、1941（昭和16）年の調査。1950（昭和25）年から1954（昭和29）年にかけて日本民族学協会の調査に加わり、その成果を元にして1969（昭和44）年の『アイヌ民族誌』を執筆。執筆と同時にここで紹介している資料の調査、とまとめられます。つまり、ここで紹介している資料は、久保寺氏が最後に残した資料というだけではなく、久保寺氏が担当した『アイヌ民族誌』の説明を補完・補充する資料だと位置づけることができます。

当館のホームページ「ほっかいどうアイヌ語アーカイブ」では、ここで紹介した資料の目次を検索することができます。また当館の図書室でデジタル化した音声聞くことができます。より深くアイヌ文化を学びたい、研究したいとお考えの方は、是非この資料をご活用いただければ幸いです。

展示/イベント協力

北海道博物館の資料やノウハウが、場所を変えて活躍しています



第 60 回北大祭 ものづくり教室～羊毛でかわいいマスコットづくり～

○主催：北海道大学大学祭全学実行委員会 ○会期：2018 年 6 月 1 日（金）～ 6 月 3 日（日）

○協力内容：解説員による羊毛の扱い方の技術指導 ・ハンドカードの貸し出し など



三笠市立博物館

平成 30 年度特別展 せいめいのれきし

○会期：2018 年 7 月 14 日（土）～ 10 月 14 日（日）

○展示されている北海道博物館の資料：

- ・アロサウルス頭骨（複製）
- ・ハドロサウルス頸骨
- ・マンモスゾウ臼歯
- ・魚類化石

北海道科学大学

北海道 150 年事業

北海道科学大学博物館～北科大で自由研究～

○会期：2018 年 7 月 27 日（金）～ 8 月 10 日（金）

○展示されている北海道博物館の資料：

- ・「雪かき」や「雪押し」などの除雪具一式
- ・「火鉢」や「薪ストーブ」などの暖房具一式
- ・「薬瓶」や「血圧計」などの医薬品・医療器具一式
- ・「札幌停車場（模型）」などの建物模型一式 など



※抜粋して紹介しています。

研究活動紹介

歴史的建造物を保存する野外博物館「北海道開拓の村」 村上孝一

研究部博物館研究グループ 学芸員



学芸員 村上孝一

1954年、長野県生まれ。北海道育ち。1980年より北海道開拓記念館（現北海道博物館）学芸員。専門は建築史。北海道の冬の住生活に欠かされたストーブを前に。

今年、北海道命名150年の記念事業が道内各地で行われています。当館でも記念事業として、第4回特別展『幕末維新を生きた旅の巨人 松浦武四郎ー見る、集める、伝えるー』を開催しました。

今から50年前、北海道では開道100年を祝う行事が道内各地でいろいろと行われていました。「道立自然公園野幌森林公園」も100年記念事業の一つとして造られ、公園の記念施設地区には「北海道百年記念塔」、「北海道開拓記念館（現北海道博物館）」の整備が進められ昭和46年に完成しました。また、北海道開拓記念館の整備構想においては歴史的な建造物を移築する野外博物館を併設し一体的に運営すること

が計画され、昭和52年から野外博物館「北海道開拓の村」（以下、「開拓の村」と表記）建設が進められ、平成10年春に整備が終了しました。

しかし、野幌森林公園に開道100年記念事業で造られたこれらの諸施設も、現在では老朽化が進みその存続が危ぶまれている施設があるのが実情です。

開拓の村整備を担当して

私は、昭和56年に北海道開拓記念館の建築史を担当する職員として採用され、道内の歴史的建造物の調査・研究や、北海道の住生活文化に関する調査・研究などを行ってきましたが、その中で開拓の村の整備事業は学芸員生活の

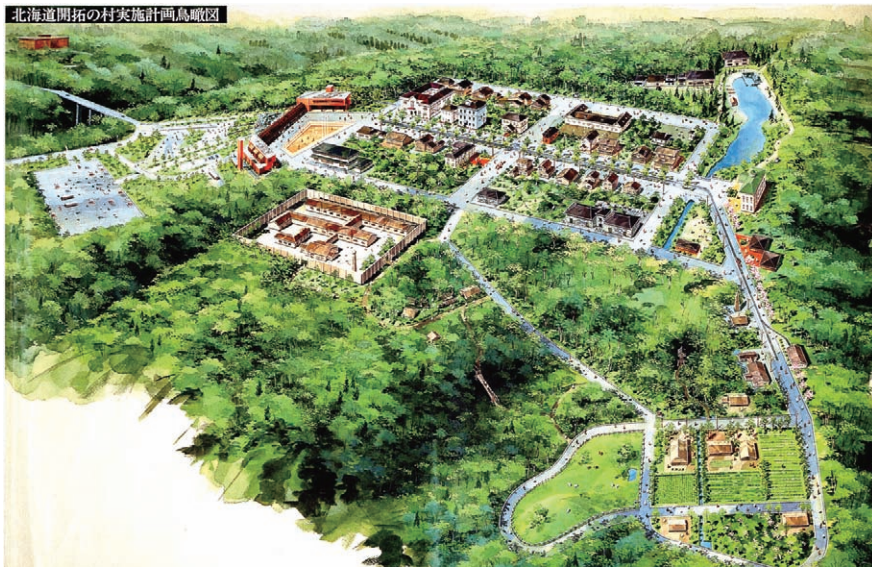
中心となる仕事でした。

採用後、開拓の村整備室に配属され、建設が進んでいた開拓の村の歴史的建造物の移築・復元工事を担当することとなりました。

実際の仕事は、開拓の村に移築・復元整備する建物の調査・研究を行い、それに基づいて建物を創建時の姿に復元する設計と工事を行うことですが、移築される明治・大正期の建物は、その時代に使われていた建築材料や建築技術で造られている建物です。

しかし、それらは今の北海道の建物では使用されていません。北海道は、開拓使の時代から官庁主導で、多雪寒冷の気候に対応する建築材料や建築技術の開発を積極的に研究し、北海道の気候に適応した建物造りを進めてきたことから、日本古来の建築材料や建築技術が早くから使われなくなった地域なのです。

北海道開拓の村実施計画鳥瞰図



開拓の村完成予想図（昭和55年）



旧東正旅館



旧武井商店酒造部



旧本庄鉄工所

移築・復元工事

開拓の村の復元工事において、北海道では使われなくなった建築材料や技術の復元が一番の問題でした。

その一つが土塗壁です。柱と柱の間に竹や葦で下地を編み、土を塗って壁を造り、漆喰を塗って仕上げる壁で、本州では土壁の住宅は現在でも多く残っています。先日中国地方の水害で被害を受けた住宅にも土壁の家が多く見受けられました。しかし、北海道では失われた技術となってしまった工法です。

開拓の村の復元工事では、文化財修復で土壁仕事の経験がある函館の左官職人や東北地方の左官職人が中心となり、札幌の左官職人が技術指導を受けながら復元工事を進めました。本からの知識しか無かった私にとっても、経験の無い札幌の左官職人とともに壁土の作り方などを一から勉強する機会となりました。また、このような形で、開拓の村の整備を進めることをとおして、札幌でも土壁を塗れる左官職人が育つこととなりました。

屋根葺でも、瓦葺や桺葺は北海道で使われなくなっていた屋根材料です。

瓦は耐火性があり本州では一般的ですが、北海道では冬の寒さで凍害を受け割れるため維持が難しく、使われなくなっていました。しかし、本州以南では現在でも一般的な屋根材であるため、本州から職人を呼んで工事を行うことができました。また、瓦葺工事に札幌の職人が参加し技術指導を受ける事で、その後の小破修繕が札幌の職人でできるようにもなりました。

桺葺は北海道で多く使われていた屋根材料で昭和30年代まで使われていました。トタン葺が普及するようになって、トタン屋根の下地葺きとして使われていました。しかし、トタンの下地材としてルーフィングが登場すると使われなくなってしまう。

北海道で「桺葺」と呼んでいる手割りの薄板で屋根を葺く工法は、一般的には「こけら葺(柿葺)」と呼ばれている日本の伝統的な屋根葺技術であり、神社・仏閣や文化財建造物に用いられてきました。京都や奈良などの西日本地域には伝統的な技術を受け継いだこけら葺を専門とする会社があり、開拓の村でもこれらの会社の職人を呼んで工事を行ってきました。

補修工事

復元工事では創建当時の姿を替えないように注意し、積雪寒冷地に少しでも対応できるような工夫をしながら工事を行ってきました。しかし、開村から35年がたつと、復元した建物の老朽化も進み、大規模な補修工事が必要となってきました。

これから永く建物を保存していくためには、補修工事を続けて行かなくてはなりません。しかし、職人が手作りの材料を使い、手作業で仕上げて行く伝統的な工法では、工場で大量生産した建材を使う現在の施工方法とは違い、工事費が高くなってしまいます。財政事情の厳しい北海道にとって、高額な修繕費は大きな負担となっています。

また、多雪寒冷な北海道の気候風土に適さないため使われなくなった材料や技術で造られている建物を保存していくことは簡単ではありません。札幌では伝統的な技術を持つ職人の確保が難しいという実情があります。開拓の村の整備事業を進めていたときには、北海道の職人が伝統工法の技術を習得する機会ともなりましたが、整備工事が終了してからすでに長い年月

がたちました。技術を持った職人は引退し、その後継者が育っていないのが現状です。

しかし、開拓の村に移築・復元した建物は北海道の貴重な文化財であり、これから先も、守っていかななくてはなりません。

そのためにも、開拓の村整備事業における歴史的建造物の調査・研究、移築・復元工事、さらには補修工事とおして身につけた調査方法や修理技術などの知識を、後輩に引き継ぐことが、北海道博物館での最後の重要な仕事と考えています。



旧札幌拓殖倉庫



旧小川家酪農畜舎



漁村郡風景

※写真はすべて移築・復元直後のものです。

トピックス

春のイベント at はっけん広場

雪がとけ、新しい命が誕生し活動を開始する春。はっけん広場ではそんな時期にあわせて野幌森林をイメージしたポップアップカードづくりを実施しました。二つ折りのカードを開くとドローンと立体的に野幌森林公園の情景が立ち上がるカードです。

まず、ベースになるカードの部分を作り、そこに用意された生き物のパーツの中から好きなものの7種を選んで貼っていき、オリジナルの公園を作っていきます。花や虫などに各自思い思いの色を塗っているうちに、時間のたつのも忘れたのか、想定時間を大幅にオーバーしてしまう子供たちもいて、お母さんがついお手伝い、という場面もよく見かけました。

子どもたちの自由な発想で「パンダ

柄のエゾシカ」・「ピンクのウサギ」・「七色の水芭蕉」などポップな新種も登場し、たのしいカードがたくさんできました。製作時間の関係で、泣く泣く(?)参加をあきらめた方もいらっしゃったようですが、そんな方には希望の光!

リクエスト殺到の際には、次年度に再度開催の可能性も…あるかもしれません。その時にはぜひリベンジを果たして頂きたいと思います。

(解説員 山田日登美)



チョキチョキ。カードの組み立ての最中



森には記念塔が…。シ・・・カ・・・が! 池が～

北海道博物館特別展×センチュリーロイヤルホテル コラボ企画

「北海道の名付け親・松浦武四郎ランチ ～大地の味～」

今年の特別展は当地が「北海道」と命名されてから150年という節目を記念し、その名称の生みの親と言われている松浦武四郎にスポットをあてた展示会を開催しました。特別展においては館内外で多くの関連イベントが企画され、来館者の皆さまより大好評をいただきました。なかでも、特別展のプレイベントとして、センチュリーロイヤルホテルの19階にある日本料理北乃路で5月12日から特別展開幕日の6月30日まで提供された「北海道の名付け親・松浦武四郎ランチ～大地の味～」には多くの皆さまより絶賛の声が寄せられました。この期間限定の特別メニューは北海道博物館とセンチュリーロイヤルホテルのコラボ企画として実現したものです。幕末維新を生きた旅の巨人・松浦武四郎の生涯を彩り豊かにプレートの上に再現した「北海道地図昆布を添えた茶碗蒸し」、「鹿肉ロースの味噌

漬け」などの逸品との出会い、厳選された素材が演出する北海道の「食」の体験をととして、お客様は武四郎が駆け抜けた北海道の歴史・文化の一端を心ゆくまで堪能されていたようです。

また5月11日にはこの特別メニュー

のお披露目にあたり報道各社をお招きした試食会が当館の石森館長をはじめ展示会の関係者参加のもと執り行われました。

(学芸部社会貢献グループ

学芸主査 杉山智昭)



アイヌ民族文化研究センターだより

アイヌ文化巡回展を上川町(層雲峡)と標津町で開催しました

当館が毎年道内各地で開催している「アイヌ文化巡回展」。

今年度も「地名」をテーマに、アイヌ語地名研究の第一人者である山田秀三氏の資料を紹介する内容で、先ず8月下旬から9月末まで上川町の層雲峡で、そして10月に標津町で開催しました。

* * * * *

■ 第4回アイヌ文化巡回展

アイヌ語地名を歩く 山田秀三の地名研究から 2018・層雲峡

期間：8月21日(火)～9月30日(日)

会場：大雪山層雲峡ビジターセンター
(上川町層雲峡)

山田秀三氏が1970(昭和45)～73(昭和48)年頃に上川盆地から石狩川上流部の地名を調査したときの資料の中から、主に地名調査に用いた地形図をパネルにして展示しました。

パネル10枚程度の小規模な展示でしたが、国立公園内のビジターセンターという場所での開催は初めてのこともあり、ご覧いただいた方々のアンケートなどを見て、これからの事業の参考にもできればと考えています。

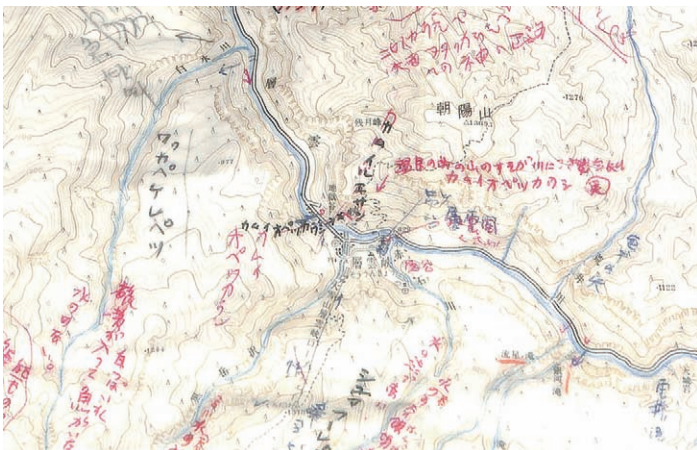


写真2 大雪山の地形図(一部)

山田氏が地名調査の記録を書き込んだ、5万分の1地形図(層雲峡温泉付近)

■ 第5回アイヌ文化巡回展

アイヌ語地名を歩く 山田秀三の地名研究から 2018・標津

期間：10月6日(土)～10月21日(日)

会場：標津町生涯学習センター

(標津郡標津町南1条西5丁目)

開館時間：9:00～22:00

(期間中無休)

山田秀三氏が1974(昭和49)年に知床半島を調査したときの記録と、1987(昭和62)年に標津の地名を調査した記録の中から標津町内のほか中標津町など周辺の地域に関する資料を紹介しました。また、山田氏は1987年の標津町来訪の際には同町でアイヌ語地名に関する講演を行っているので、その記録などもあわせて紹介しました。

(アイヌ民族文化研究センター長

小川正人)



写真1 山田秀三氏

石狩川源流部を調査中の山田秀三氏。手に持っている地図が、写真2の地形図だと思います。

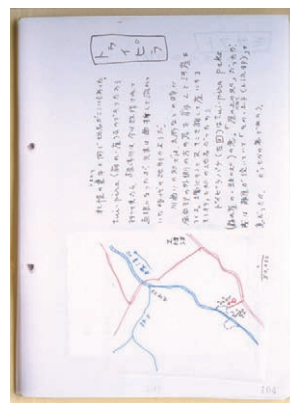
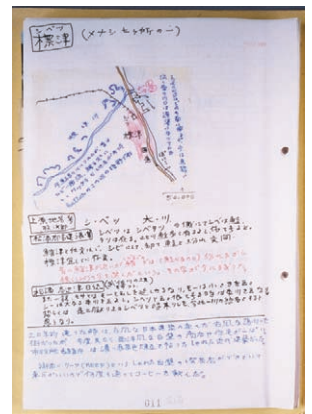


写真3 標津の地名調査記録

山田氏が標津地方の地名調査記録をまとめたファイルの一部(1987年)

活動ダイアリー

2018年6月～8月(6/18～8/31)の記録

※■は展示活動、■は教育普及活動、■はその他の博物館活動です。

6月24日(日)

■ちゃれんがワークショップ「縄文土器をつくる(全2回)」第2回「焼く」を開催。担当：右代啓視・鈴木琢也。

6月28日(木)

■マスコミ、ブローガーへの特別展説明会を開催。

6月30日(土)

■北海道150年事業・松浦武四郎生誕200年記念第4回特別展「幕末維新を生きた旅の巨人 松浦武四郎ー見る、集める、伝えるー」が開幕。(～8月26日(日))

■特別展開幕にあわせ松阪市PR事業を開催。

7月1日(日)

■特別展開連イベント「アイヌ民族の伝統芸能公演」を開催。公演：千歳アイヌ文化伝承保存会。

■講演会「武四郎の道は未来へと続く」を開催。講師：山本氏(松浦武四郎記念館)。

7月7日(土)

■ちゃれんがワークショップ「のこぎりでネームプレートをつくろう」を開催。担当：青柳かつら・山際秀紀・池田貴夫。

7月8日(日)

■ちゃれんがワークショップ「石器をつくる」を開催。講師：本吉春雄氏(湧別川流域史研究会会長)、担当：右代啓視・鈴木琢也。

7月14日(土)

■総合展示室クローズアップ展示①～⑦を展示入替。①古文書を読む／新着資料 フラッシュメモの古文書、②「北海道の名付け親」松浦武四郎の語られ方、③人と歴史とー川村力子と旭川ー、④仕事とくらしのうつりかわり1 毒矢の禁止、そこからの歩み、⑤集治監と囚人労働、⑥「北海道百年」、⑦「生き物たちの北海道」の150年

■かるちゃんnet(文化施設連絡協議会)特別企画「てくてく、べったん!かるちゃんスタンプラリー」を共催。(～8月19日(日))

■ミュージアムカレッジ「特別展 こがえどころ!」を開催。担当：三浦泰之。

7月15日(日)

■特別イベント「北海道ジオパークまつり2018」を開催。担当：道内ジオパーク関係者。

7月16日(月・祝)

■ハンズオン「リンリン黒電話」を開催。

■ミュージアムトーク「松浦武四郎が書いたアイヌ文化」を開催。担当：遠藤志保。

■屋上スカイビューを特別開放。

7月17日(火)

■北海道みんなの日(道みんの日)により総合展示室の無料開放を実施。

7月21日(土)

■特別展開連イベント「アイヌ民族の伝統芸能公演」を開催。公演：平取アイヌ文化保存会。

7月22日(日)

■ミュージアムカレッジ「武四郎リレー講座 ①動物と植物のお話」を開催。担当：表溪太・水島未記。

7月24日(火)

■第4回特別展「幕末維新を生きた旅の巨人 松浦武四郎ー見る、集める、伝えるー」入場1万人セレモニーを開催。

7月25日(水)

■全国知事会 in 北海道のプレイベントとして、三重県知事ほか全国各県の関係者が視察。

7月26日(木)

■教員のための博物館の日 in 札幌を開催。(～7月27日(金))

■サハリン州郷土博物館より2名の研究者(生物学)を招聘。北海道内で共同調査を実施。(～8月9日(木))

7月28日(土)

■ちゃれんが子どもクラブ「めざせ!武四郎 消しゴムでオリジナルはんこをつくろう!」を開催。担当：三浦泰之・水島未記。

7月29日(日)

■ちゃれんが子どもクラブ「めざせ!武四郎 自分の作品で巻物をつくろう!」を開催。担当：佐々木利和・櫻井万里子・田村雅史。

8月1日(水)

■北方領土啓発パネル展が開幕。(～8月31日(金))

■はっけんイベント

「『和とじ』de 自由帳」が開幕。(～8月19日の毎日、25日、26日)

■平成30年度第1回北のミュージアム活性化実行委員会を開催。

8月2日(木)

■北海道博物館とロイヤル・アルバータ博物館の友好館・共同研究に関する覚書の調印式を実施。



8月4日(土)

■ちゃれんが子どもクラブ「ヤマアラシの針でアクセサリーをつくろう!」を開催。担当：表溪太・池田貴夫・村上孝一。

■福井県内閣府特命担当大臣(沖縄及び北方対策)が視察。

8月5日(日)

■ミュージアムカレッジ「武四郎リレー講座 ②漁業と考古遺物のお話」を開催。担当：会田理人・鈴木琢也。

8月11日(土・祝)

■ハンズオン「毛皮にさわってみよう」を開催。

■ミュージアムトーク「蒐集家武四郎と考古遺物」を開催。担当：鈴木琢也。

■雨天により屋上スカイビューの特別開放を中止。

8月12日(日)

■ミュージアムカレッジ「1818ー生と死ー」を開催。担当：佐々木利和。

8月17日(金)

■博物館教育プログラム研修会を開催。

■第4回特別展「幕末維新を生きた旅の巨人 松浦武四郎ー見る、集める、伝えるー」入場3万人セレモニーを開催。

8月18日(土)

■ちゃれんが子どもクラブ「草原の主・トノサマバッタをさがそう」を開催。担当：堀繁久・水島未記・表溪太・小川由真・濱本真琴(自然ふれあい交流館)。

■ちゃれんが子どもクラブ「めざせ!武四郎 夏の思い出絵日記スゴロクをつくろう!」を開催。担当：栗原憲一・遠藤志保。

8月19日(日)

■「北海道はゴールデンカムイを応援しています」スタンプラリーに協力。(～2019年3月31日(日))

■特別展開連

イベント「ア

イヌ民族の伝

統芸能公演」

を開催。公演：

帯広カムイ

トゥボボ保存

会。

■ミュージアムカレッジ「武四郎リレー講座 ③貝とアンモナイトのお話」を開催。担当：圓谷昂史・栗原憲一。

8月25日(土)

■特別イベント「地図を楽しもう!ー北海道ってどんなところ?ー」を開催。担当：栗原憲一・遠藤志保、協力：北海道地図株式会社。

8月26日(日)

■特別イベント「フォーラム 松浦武四郎研究のこれまでとこれから」を開催。講師：田端宏氏(松浦武四郎研究会会長)、五十嵐聡美氏(北海道立近代美術館)、内川隆志氏(國學院大学)、太田光俊氏(三重県総合博物館)、谷本晃久氏(北海道大学)、三浦泰之。

館長メッセージ

この度の台風21号及び北海道胆振東部地震によって被害に遭われた方々に、心よりお見舞い申し上げます。当館はこれまで、近隣の札幌市や江別市、北広島市などの皆様をはじめ、北海道の各地そして道外の各地から、数多くのお客様をお迎えして参りました。皆様のご無事を心より祈念いたします。当館の安否にお気遣いをいただいた方々、当館ご利用のご予約についていち早くご連絡をいただいた各地の学校等の方々、そして被災からの復旧に様々なご尽力・ご支援をいただいている方々に、厚くお礼申し上げますとともに、皆様には、今後とも当館をぜひともご利用下さいますように、心よりお願い申し上げます。

2018(平成30)年10月 北海道博物館長 石 森 秀 三

来館者数

○2018年6月～8月

総合展示室 41,371人 特別展示室 45,535人 はっけん広場 6,524人

○累計(2015年4月～2018年8月)

総合展示室 393,730人 特別展示室 294,146人 はっけん広場 92,253人

森のちゃれんがニュース 第13号

発行日：2018年10月19日

編集・発行：北海道博物館

〒004-0006 札幌市厚別区厚別町小野幌53-2

Tel. (011) 898-0456 Fax. (011) 898-2657

ウェブサイト <http://www.hm.pref.hokkaido.lg.jp>

©Hokkaido Museum, 2018